YOU＝？　鏡あわせの平衡世界

冴野一期

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＹＯＵ＝？　鏡あわせの平衡世界

【Ｎコード】

Ｎ５０９０Ｕ

【作者名】

冴野一期

【あらすじ】

日常系ファンタジーではないでしょうか。

01

世界に平和はおとずれない。

それは十六年しか生きていない、田舎の女子高生にだってわかった。

戦争、環境汚染、貧富の差、思想の違い。

歴史の教科書に書かれたことは、べつの世界のおとぎ話のように退屈だった。実感なんてわかず、代わりにもっと単純な『異世界』と呼ばれるものに、当時の私は興じていた。

「――日野、日野」

誰かが呼んでいた。あたしは自転車をこいでいた。

夏が近くなってきた夕暮れのなか、坂を上りきる。一息ついて、両足をついた。向かって左手に、本州と四国の間に広がる瀬戸内の海が広がっている。遠目に無人島がぽつんと浮かび、その周辺を小船が行き来する。夕日はもう少しで、海に着水しようとするところだった。

「――日野（ひの）、唯（ゆい）」

風がすずしい。

まだ海を回遊している海鳥も、遠目に見える山の向こうへ帰っていく。あたしも正面に向きなおって、もう一度ペダルを踏みこんだ。うっかり背の低いガードレールをとび越えてしまわないように、ブレーキをかけながら、坂道を降りていく。

「――起きてるか？」

夏の風をきっていく。右方向に、流れるような緩いカーブが来る。ハンドルを少し傾ければ、景色は後ろに流れ、太陽のまぶしい斜陽が目にうつった。

「起きなさい、日野唯」

閃光はまっすぐ、あたしの体を貫いていった。
視界が揺れた。世界が変わる。ぱぁん、と音が響いて、頭が痛い。
「っ！？」
にぶい痛みと、吹っ切れたような明るい声が、あちこちから聞こえてくる。
なんなの、と思ったときに、
「目、さめたか？」
「……ぁ」
「おはよう、日野」
冷めた眼差しが、あたしを見下ろしていた。叩かれたらしい頭頂部を抑えつつ、半身を持ちあげる。
「……お、おはようございます、先生」
瀬戸内の海は、教室の風景に変わっていた。沈みかけていた太陽はまだ高いところにあって、その下に広がる砂地は高校の校舎。つまり、
「授業の続きをして構わんか？」
「ど、どうぞ……」
うかつ。よりにもよってこの時間に居眠りするなんて。急いで体を起こして、背筋を伸ばす。頭を下げたら、額をかるく机にぶつけてしまった。
「まだ寝惚けてるのなら、保健室に行きなさい」
「いえ、大丈夫です。すみません」
銀縁フレームメガネの内側にある目が、普段よりも二割増しで鋭い。反対に、まぬけな様を表しているだろうあたしを見て、クラスの一同からも笑いが起きる。
「ゆーい、寝すぎだよー」
「ってか、きっしー、教科書の角はやりすぎやって。日野だって、いちおう女子っすよ～」
「新本、先生をあだなで呼ぶんじゃない」
「きっしー♪」

どっ、と沸いた。
週末、午後の授業だったせいもあってか、クラスメイトのうっぷんが、ここで一気に吹き出たらしい。全体が笑いの渦に包まれるなか、あたしだけが申しわけなく縮こまる。きっしーこと、岸田直人（きしだなおと）先生は、呆れも増したように呟いた。
「授業中だぞ、静かにしろ。貴様ら」
「はい、いただきました〜！　きっしーの、キ・サ・マ・ラ・！　ホシみぃ〜……っで！？」
岸田先生が、片手に持っていたチョークをダーツのように飛ばす。見事、あたしの隣に座る男子生徒の額に、突き刺さったらしい。
「新元、次は二本同時に投げるぞ。覚悟はいいか？」
「ってぇー。現実にチョークとか投げる先公、初めてみたっす」
「次は赤と黄色だな」
「うわっ　暴力反対っ」
茶髪の男子生徒が、ニヤニヤ笑みを浮かべていた。新本って名前の男子は、このクラスのにぎやかし担当で、今は「ひー」とか言いながら、わざとらしくひるんだ。それを見て、また教室が沸いた。先生はその声を無視してこっちを見る。
「日野、体調は大丈夫か？　七月に入ってから少し集中力に欠けてるぞ」
「すいません、その……。次は気をつけます」
「きっしーの指導が、キビシーんじゃねぇのー？」
いい加減、うるさいアンタ。睨んでやろうかと思ったけど、先生はその言葉を本気にしたのか、
「日野、部の朝錬、キツいか」
「い、いいえっ」
耳元にかかる、あたしと同じくらいの短髪が、わずかに風にゆれる。シワ一つないグレーのコートがとても似合っていると思う。あたしが所属する陸上部の顧問もしている岸田先生は、まだ二十台と若くて、背が高くって、全体的に細身であっても華奢じゃない。さ

らに言うなれば独身だった。
「あの、ほんとっ、大丈夫なんで！」
「そうか。まぁ、歴史の授業なんぞ退屈かもしれんがな。少なくとも、人の話を聞きながら眠るのは、失礼なことだと覚えておきなさい」
「は、はいっ、申し訳ありませんっ」
正論だ。それにしても、岸田先生に怒られているのに、なんというか、こう、顔が緩んでくるのを堪えたり、さらに胸が高鳴ってくるのは、いろいろ間違ってると思う。
（あたしはヘンタイか……）
思ってしまったその時、新本がまた、空気を読まずに言った。
「ってかマジな話、なんで年代とか、細かく暗記しないといけねーんすか」
岸田先生はそっちを見て、真面目に答えた。
「その方が、テストの問題を作りやすいからだ」
「うわっ、大人って汚い！　きちく！　さすが『鬼畜メガネきっしー』！」
「誰が鬼畜メガネだ。それより今から解説するＰ１０７以降、今月末の中間に集中して出すぞ。点を取りたかったら叩き込んどけよ」
その一言をきっかけに、クラスが真面目モードに代わる。あたしも赤ペンを用意して、先生の低い声に耳を傾けながら、片っ端から赤線を引いていった。

＊

（ダメだなー、もっとしっかりしないと……）
授業が終わって、休憩時間にのんびり欠伸なんかをしていた時だ。
「ゆーい、目は覚めたかねー」
「……真奈（まな）」
中学からの友達が、あたしの机にちょこんと乗ってきた。赤と紺

のストライプのスカートから伸びた足が、大きくはだける。
「真奈、スカート」
「おっと」
すぐに所作なく、綺麗な足を布で隠す。それから私のすぐ正面で、にこりと笑った。
「ゆーい」
いつものように手を伸ばして、あたしの頬を掴もうとする。まだ頭がぼうっとしていたので、されるがままに伸ばされてやった。
「んー、やっぱ柔らかいわぁ。えぇわぁ、唯ちゃんのほっぺ、この感触が癖になるわぁ」
「……アンタはエロオヤジか」
「にへへへへ」
言葉とは裏腹に、可愛らしく笑った。そうすると、ただでさえ素材の良い顔が、ますます可愛くなる。一つにまとめたポニーテールが、リスのしっぽのようにふわふわ揺れる。
（こんな顔を向けられたら、そりゃね）
勘違いした男子大勢が、告白の言葉やら、ラブレターを送るのも納得だ。
そんな真奈と違って、あたしは高校に入学してからも「にょきにょき」と、タケノコのように背が伸びている。自分でいうのもなんだけど、運動神経はいい方で、今でもあちこちの運動部からスカウトの声をかけられる。ただ、その反面「かわいー」とか「女子らしー」とかいうのとは、悲しいほどに無縁だった。
「どしたの、ゆーい。真剣な顔して。カッコイイ～」
「やかましいわ」
「惚れるわー」
「それ、冗談になんないから」
私だって仮にも女子校生だ。靴箱に手紙が入ったのを見つけて、いそいそと裏口に向かえば同級生の女子がいたという、二重の意味でビックリドッキリした過去は、もう忘れたい。

「ところで、ゆーい。話変わるんだけど。今晩どうする？」
「なにが？」
「イセカイ、行けるでしょ。夜の十時ぐらいに電話していいかな？」
「……またぁ？」
真奈が乗り気になって身を出してくる。逆にあたしは少し引いた。
ここ最近、寝不足なのは、その『異世界』が原因なのだから。
「いいじゃない。メインクエストはさ、あと一つだけでしょ？　それに明日は土曜だし」
「関係なし。帰宅部の真奈と違って、あたしは部活の朝練だってあるんだよ」
そう言ったとき、真奈の唇があたしの耳に近づいた。ふっと息を吹きかけるように、声を潜めて言ってくる。
「耳より情報～。今週の日曜日「海の見えるカフェ」では、『お兄ちゃん』が久々に専属バーテンダーを致しますぅー」
「なっ！」
真奈の本名は、岸田真奈。
そして、お兄ちゃんとはつまり――岸田先生なのだった。
あぁ、瀬戸内の青い空と海、それから本州と四国をつなぐ瀬戸大橋も一望できる、小高い丘にあるカフェテリア。その場所で――
「岸田先生が、あの冷酷な眼差しで、直に煎れてくれたコーヒーが飲める……っ！」
「……ゆーいって、ちょっと変な性癖あるよね」
「そ、そんなことないっ！　でも、あっ、ほらっ！　真奈のお父さんやお母さんだって、当日もお店やってるんでしょ」
あたしが慌てて言うと、真奈がにーっこり、微笑んだ。
「いないよ。最近ＣＭやってる、日本のホラー映画あるでしょ。すごい怖いって評判のやつ。日曜に橋渡ってさ、家族で見にいくんだよねぇー」
「……先生は？」
「お兄ちゃん、ホラー映画すっごい苦手だから。ジェットコースタ

ーとホラー映画見るぐらいなら、家で働いてる方がマシだって」
なるほど。
あたしは頭のメモ帖にある先生のプロフィールに、せっせと書き加えた。
「コーヒータルトのセット、私がお金払っとくからさ。あとねー、日曜日の午後って、予報だと雨降りそうだし。雨の日ってお客さんも少ないから。カウンター席で、お兄ちゃんと二人きりとか、あるかもよ？」
「真奈っ！　あたしら親友っ！？」
「心の友と書いて、大心友だよっ！」
がしっ。
決まりだ。日曜日は、岸田先生の鋭い目つきと、胸を飾ったエプロンとのアンバランスを楽しみながら、直に煎れてくれるコーヒーを飲む。
「というわけで、日曜日は奢ってあげるから。今日は一時間だけ、時間ちょうだいね？」
「わかった、わかったから」
「やった。じゃあ夜の十時ぐらいに、電話すんね～」
「はいよ」
結局、真奈の押しに負けてしまった。もうひとつ欠伸を噛み殺したときに、休み時間が終わるチャイムが鳴っていた。

02

家に着いたのは、大体いつもと同じ時間、午後七時をすぎたところだった。玄関の塀を抜けると、庭にある腰かけに座っていた父が顔をあげた。

「ん、おかえり」

「ただいま」

ワンポイントのハチマキ、白いTシャツ、黒のショートズボンという、いかにも「日本のお父さん」という最高にラフな格好で、咥えたタバコから白い煙を気持ちよさそうにあげていた。ここ数年で、白髪が少し増えた。

自転車から降りて、手押しで少し駆ける。いつもの場所、車庫の奥に自転車を立てかけて、玄関と庭に通じる方へと向かう。

「お父さん、小説の話を考えてたの？」

「大方解決したよ」

父の言動には癖があった。質問をすると、返答の過程をいくつか飛ばして、回答だけが来る。

「オーソドックスな手法を用いる。密室殺人を解決するにはやはり、探偵役が論拠を並べていくのが、一番シンプルだと思う」

「うん、がんばって」

「ありがとう」

父はミステリ作家だ。物語の中では必然的にたくさん殺す。だけど本人に特別な害意はない。ご近所からどう思われているかは、やや怪しいけれど。

「お父さん、今日なに食べる？」

「すきやき」

父が立ちあがった。後ろの窓を開き、居間に通じる部屋に入っていく。あたしも家の鍵を使って玄関を開けた。

あたしは父と二人暮らしだ。家に揃っているときは、料理もたいてい二人で作る。主にあたしが具を切って、父が味付けをする。食材は父が昼間に買っておいてくれる。
「お父さん。煮汁の方よろしく」
「ん、今日はこのくらいにしよう」
父が頷いて、醤油をいれた。家の料理は基本的に安定しない。父が料理下手というのではなく、意図的にそうするのだ。おかげで小学生の頃は、メニューは変わるけれど、大方の味が変化しない給食を、ものすごく不思議に思っていた。
「今日のすきやきは、少し甘いぞ」
「えぇー、わたし辛い方がいいかも」
「わかった、読者の意見は絶対だからな」
父が棚から「タバスコ」を取り出した。さすがにそれはないでしょうと、白髪の目立つ頭を叩いてやった。

夕飯を食べ終えて洗い物をしていたら、九時を回っていた。真奈との約束まで、大体あと一時間だ。
「お父さん。あたし十時ぐらいから友達と約束が、えーと……、ゲームして遊ぶ予定があるから、お風呂に先入っていい？」
「気をつけて」
父と並んで食器を洗いながら了承を得た。それから「唯、明日は？」と聞かれたので、慣れている私は自然と応えた。
「六時起きで、部活の朝練かな。お昼には帰る。午後からは空き」
「そうか。僕はしまなみ街道に渡って、伯方へ取材。証拠写真を撮って、現地の人に話を聞いてくる。帰宅してから推理する。君もあまり、無茶しないようにね」
「うん。じゃあお風呂に入ります」
「はいはい」

その後、お風呂に入ってさっぱりしたあたしは、自分の部屋に戻

るまえに書斎を覗いてみた。半分開いたままの内側から「カタカタカタタタタ……」と、高速でタイピングする音が聞こえてきたので、そっとしておいた。
　静かに階段を上がって、自分の部屋に戻る。時刻はちょうど午後十時。軽くストレッチなんかをしていると、真奈から電話が来た。
「あっ、ゆーい。準備おっけ？」
「いいよ。待ち合わせ場所はロビー？」
「そだね。『バザー』で、アイテム見てから行こ」
「わかった。プレイ時間は一時間だよね。というか、それ以上は無理」
「うん。じゃあログインするから、後でね」
「了解」
　電話を切った後で、あたしはベッドに横になる。それから一般に『ヴァーチャル・ギア』と呼ばれている、満天堂の、最新ゲーム機の本体を頭につけた。中に入っている機械は、高校一年のあたしなんかには、及びもつかない技術が使われているらしいけど、「ギア」の外見は、音楽を聴くヘッドホンと、目のところを覆う、サンバイザーのような物が取りつけられているだけの、シンプルな物だった。そしてこれとは別に、ワイヤレスでの「コントローラー」が存在する。
「ふぅ」
　一つ深呼吸をしてから、まぶたを閉じる。右耳を覆ったヘッドホンのところにあるスイッチを押すと、ピッ、と短い起動音。
『――ＩＤとパスワードを、音声でお応えください』
　なめらかな女性の声。あたしはメモした紙を手に、返事をした
「あい・でぃーは、０１１０・１１０１・１１００・００１０．パスワードは……」
『――認証しました。日野唯は、前回のログインから二十三時間が経過しています。脳波に異常は見受けられません。仮想現実・年齢区分Ａへのログインを許可します。ご希望のプレイ時間は？』

「一時間。プラス十五分を、ロスタイムの設定で」
『――承認しました。現在の健康状況からも、問題ありません。ですが不意に気分が悪くなった場合などは、ただちにログアウトしてください。よろしいですか？』
「はい」
『――ではこれより、あなたの健康面に対するメッセージ、および、道徳面での行為を申告・注意いたします。よろしいですか？』
「はい」
応じると、女性の声が決まり文句を読みあげていった。長い前置きが終わり、最後にもう一度、要請が来た。あたしは同じように「はい」と応じた。
それからしばらく、目を閉じた世界は、当然のようにまっくらで。
けれど不意に『光』が来た。
続けてすぐ、コミカルなピアノの音が混じる。
音と共に、言葉が流れこんでくる。

『アナザーワールドへ　ようこそ』

03

世界が広がる。
作り物であることを思い浮かばせる、パステルブルーの空と雲。
地平線まで見渡せる、平面な白い大地。ところどころ、おとぎばなしの絵本に出てくるような、赤レンガの建物。そういうのが、転々と地面から「生えている」。
アナザーワールド。
直訳して「別の世界」と呼ばれる仮想現実は、日本では「イセカイ」と呼ばれている、ゲームの世界だった。
『こんばんはー』
『こんー』
『いやー、そろそろ落ちです。明日仕事で超はやいんで』
『また遊びましょーねー』
『おつー』『おつかれー』『乙カレー』
そしてこの世界には、ちょこまかと、大勢の「三頭身」のキャラクターが歩きまわっている。極端にデフォルメされた可愛らしいキャラクターは「アバター」と呼ばれる、あたしたちの「分身」だった。
四国の田舎町では、市内でもこんなに見ないよねという数のアバターが、ところ狭しと歩きまわる。

『ねぇねぇ、今日どこいく』『レアアイテム欲しいなー』
『パーティー組みませんか。あとひとりー』『ミスリル鉱石と、アダマン原石の交換希望』
『未鑑定アイテム鑑定できる人いませんかー？　一個五十ゴールドでよろー』
『やるよ鑑定。ささよろ』
『クエアイテム売りますっ。七色蝶の羽、@三十ですっ』

『鍛冶スキルＭＡＸのブラスミっす～。百ゴールド均一で、武器修理しまうま』

わいのわいの、ちょこちょこちょこ。きゃあきゃあきゃあ。

髪の色も、瞳の色も、肌の色も、服装も、なにもかも違う小人たち。

見た目が「かわいい」ところは共通しているけれど、現実と同じか、それ以上のオンリーワンと言える個性を集めた面々が、無数に喋り、会話している。

（えーと、真奈は？）

私は一時、流れる『全体ログ』をカットする。

この世界は、自分の視点で見ているわけじゃない。父の書く、三人称視点の小説を読んでいる読者のような「神様視点」の感覚で、あたしはこの世界を「覗いている」。

それでいて意識の中心は、自然と「画面中央」の自分のアバターに向かうのだった。

私には何がどうしてそうなるのか、さっぱり分からないけれど、ともかく、偉い人が作ったゲームだということで。

私は「ささやき」を選択して、肉声で『マナ』にだけメッセージを送る。

（マナ、マナ、ログインした？）

（ユーイどこー？）

（中央広場は、人多いね。西の職人街に移動しよう）

（はいよー）

異世界での、私の名前は『ユーイ』。

ユーイの外見は、黒くてツンツンした髪の短髪、女子にしては目が小さくて、愛想が無い。黒いキャミソールに、革でできた黒の長ズボン。足下はバックルがついたブーツで、これも黒だ。アクセサリーの類はつけてない。

あとは、背中に大きな剣を背負っている。金色の帯が前を回って

いて、鞘留もまた金色に輝いていた。けっこう貴重な剣らしい。装備していると「それ、どこで手に入るんですか？」ってよく聞かれた。
ただ正直に言うと、このアバターは、あまり「女の子」っぽくない。
むしろ、なんていうか、少年剣士のイメージが強かった。真奈に言わせると、現実のあたしを三頭身にして、そのまま剣を持たせた感じらしい。
（……キライじゃないんだけどなぁ）
本音を言えば、仮想現実の中ぐらい、こう、お姫さまっぽいのがよかった。
「ユーイー、どこおるんー？」
真奈、この世界では「マナ」という名前の友達が見つかった。
茶髪で、頭には花のようなヘッドバンドと、ぴこぴこ動く小動物の耳。着ているのは薄ピンク色の、蓮の花のようなフリルスカート、後ろからはリスのしっぽが揺れていた。足下はバレリーナが履いているような、小さなシューズ。片手には、先端に宝石がついた金属の杖を持っている。
「ユーイ、こっちこっち。えへへ」
マナの格好は、装飾過剰でファンシーだった。でも、三頭身にデフォルメされた格好には、特別な違和感を感じさせず、むしろ普通にかわいい。
「……どうして、こんなに差がでるか」
「え？」
「なんでもない」
世の中は、不公平にできているなと思う。
「それで、マナ。どこ行くの」
「そりゃ魔王退治でしょ」
さくっと言った。
「一時間でいけるかな？」

「急げば三十分でいけるってネットで見たよ。ほら、この『異世界』って、なんだかんだで全年齢だしね」
「誰でもクリアーできるってか」
「そーそー、サービスいいよね」
アナザーワールドの世界観は、ひたすらシンプルだった。
この世界には魔物と、それを率いる魔王がいて、人々を苦しめている。あたしたちは、その魔王を倒すために別世界より召喚された勇者なのだ。
「ほら、ユーイ、はやく露天まわって、依頼もらいに行こ。遊べる時間すぎちゃうよ」
「わかってるから、引っ張らないで」
「えへへ、ユーイとデートやでー」
「デートって言うな」
女同士なのに。
まぁ、このアバターだと、そんな風に見えても仕方がないかもしれない。
（あたしがデートしたいのは、アンタのお兄さんなんですが……）
とはいえ、ゴールデンウィークの休みに、真奈からやってみようよと誘われて二ヶ月。なんだかんだで、この「アナザーワールド」に、私は半ばハマってしまっている。岸田先生の授業中に、うっかり居眠りをしてしまうぐらいには。
（せっかく、先生の高校に受かったのになぁ……）
まぁ、所詮は田舎で過疎も進んでいるから、倍率なんて知れてたんだけど。
それでも偶然に同じクラスの教師と生徒になったのは、飛び上がりたくなるほど嬉しかったのは確かだ。
マナに腕を組まれながら、プレイヤーが手に入れたアイテムを売っている露天を、ぐるっと見て回った。
「あっ、ポーション、ねぇねぇ、ユーイ、ポーション買った？」

「持てるだけ買ってるよ。マナこそ、毒消しとめぐすりと、天使の羽は持った？」
「だいじょぶ、だいじょぶ、いざとなれば魔法使えるし」
「ジェムストーンは？　無いと使えないよ」
「え、あっ、ない。忘れて――むむっ、そこのアクセ可愛い～っ！」
マナの頭の上の三角耳が、ぴこぴこ動いた。リスを模したしっぽが、ふわぁ～っと膨らんだ。
「それより急ぎで買うものあるでしょうが。時間ないって言ったのはマナだよ」
「え？　急ぎで買うもので、ポーション？」
「……おい」
リスは後で食べようと思った果物の種を、地面に埋める。そして埋めたことすら忘れて、果物の樹が生える――――。
「伊達に、森の執事とか言われてないよね」
「ほえ？」
「いや、マナは可愛いなって」
「あっ！　今バカにした！　なにか分からないけどバカにした～～っ！」
そんな感じで、露天を一通り見てから、あたしとマナは、白い大地の真ん中に生えている、一番大きなお城に入っていった。
川にかかった橋を渡り、城門を抜けて、中に入る。
露骨にキラキラした階段をのぼり、パステルカラー一色の、赤い絨毯がしかれた上を、まっすぐ進んだ。その先にいる、玉座に座った、白ヒゲの男性の前で頭をさげる。
「――おぉ、よくぞ無事に戻られた。勇者ユーイ、勇者マナよ」
「どうも。いつにも増して、なにもしてませんよね、王さま」
「そうだそうだ！　このヒゲおやじ！」
「――魔王を守る四天王は倒され、今ここに『火』と『水』と『土』と『風』。四種の力を司りし宝玉は戻ってきた。闇の封印も解かれたいま！　あとは魔王を倒し、光の巫女を救いだすだけじゃ！」

「たまには自分で頑張ってください」
「ヒゲ！　働け！」
「おぉ、そうか、やってくれるか。では、朗報を心待ちにしておるぞ」
話はいつものように、あっさりまとまった。私たちは外にでて、水色の空と、白い大地の上を駆けていった。

空はゆっくりと暗転していく。灰色の雲が立ち込める。黄色のわかりやすい稲妻が落ちまくり、荒れた大地の上には、枯れた木々が所在なさそうに立っていた。
「――見えた、魔王の城」
地平線の先、丘の上に建つ、黒一色の城が見えてきた。
「そろそろ敵でるかなー？」
「言ってるそばから、来たよ」
地面が盛りあがる。土煙を散らせたそこから、六本腕の、骨の魔物があらわれた。それぞれの手にはすべて剣を持っている。
カタカタ、カタカタと音が鳴る。
「すけさんだ」
「すけさんか」
スケルトン・ウォリアー。通称「すけさん」。
カシャンカシャンと剣を鳴らして近づいてくる三頭身のほねっこを、私も剣を抜いて構える。先手必勝。

――ヒュン、ズバッ、ドグシャァーッ！

「ふっ、またつまらぬ物を斬ってしまったね、ユーイ」
「だね」
すけさんまっぷたつ。ボボッと炎に包まれて消えていった。
「にゃはは。ザコに用はないのだよ」
「やっつけたの、あたしなんだけどー」

経験値とお金をいくらか手に入れたのを確認して、背中に剣を収める。
「いやー、やっぱ強いよねぇ、バルムンク。すけさんなら、一撃じゃん」
「うん、強いね」
週末の、特別なクエストのドラゴンを倒して手に入れた、バルムンクと呼ばれる剣。
数百人のプレイヤーが、巨大なボスに挑むというお祭り的な催しだった。少しでもダメージを与えていれば、それぞれのプレイヤーにアイテムが配られたのだけど、そのときに私はこの剣を、マナは何故か、リスの尻尾を手に入れていた。
「さー、この調子で魔王もスパンッと倒しちゃる！　主にユーイが！」
「マナも戦ってよ」
「かしこい賢者は、物陰から『ぺちぺち』やるんだよぅ」
「その発言、あたしを壁にする気満々よね？」
「うむ、手柄はいただく」
堂々と告げるリスに向かって、剣を振るったりしながら、ふたたび魔王の城に一直線に向かう。するとまた、地面が盛りあがって、薄い土煙の効果が舞った。
「すけさん、ふたたび？」
「今日は多いね」
収めたばかりの剣を、また抜き放つ。あらわれたのは、黒い子猫だった。
「あっ、かわいー。なにこれ知らない」
「……敵なの？」
子猫がじっと、あたしを見てきた。金色の瞳が細めになって、にゃあ、と鳴いた。
なにか妙に、リアルだなって思った。猫は元から、三頭身ぐらいの生き物だけど、その毛並みの一本までが、まるで本物のように艶

めいているみたい、とか、思った時だった。
「――貴女は、」
私の側に、飛び移ってきた黒猫が告げてきた。
「貴女は眩しすぎる」
「え？」
「光は封じなければいけない」
いきなり視界がゆがんだ。くらりと体が揺れた。
暗闇に暗転する。なにも見えなく、聞こえなくなる。
世界が遠ざかっていく。

04

「――ユーイ　ユー……」
誰かが呼んでいた。私は暗闇を漂い、落ちていた。
次に、雨粒のように小さな水の音を聞いた。それは広がって、ざざ波の音に変わる。両方の足が波にさらわれていた。ざざ、ざざざっ、と塩水に浸かる。
「……」
深淵のように広がる空が見えた。星が無数に輝いて、魚が跳ねたのか、水をはじく音が聞こえた。
指先だけ動く。ざらりとした砂の感触がした。私は砂浜に倒れているんだって、ぼんやり思った。それに混じって、
「――おい、生きてるか、おい」
砂を蹴る音が近づいてきた。せめて首を傾けようと思ったけれど、ひどくしんどかった。身体は動かず目を閉じてしまう。世界がふたたび、まっくら闇になる。
「――生きてるなら返事をしろ、おい」
眠ってしまう前に、小さくつぶやいた声を耳にした。

不意に、自分の体に重みが増した。手足に血がめぐり、心臓が急く。
「う……？」
声を認識する。どこだろう、ここ。
肌寒い。ベッドのシーツだろうか。柔らかくて気持ちがいいのだけど、少し身体がベタついてもいた。
「……なにが、」
少しずつ理解する。波の音を聞きながら、空を見上げていたこと。誰かに助けられたらしい、ということも。そのまえは、
（どうしてたんだっけ……？）

頭がズキンと痛む。とりあえず起きあがると、左手には、ベランダに出られる大きな窓が見えた。そっと触れ、カーテンを開けてみる。

「わ」

一面に広がる海と、空が、広がっていた。

時間は昼前だろうか。空は気持ちよく晴れていて、風が少し強い。白くちぎれた雲が、風に押されて進んでる。突き抜けたコントラストのある「青」の中を、カモメが気持ちよさそうに飛んでいた。

「あれは……？」

もう少し身を乗り出してみると、海のうえに巨大な「うずしお」が、あちこちでうねっているのが見えた。その上には、白い巨大な橋が、かかっているのだけど。

「壊れてる？」

橋は、半ばから両断されたように割れていた。その下にちょうど、一番大きな「うずしお」が、ごうごうと音を立てて渦巻いている。

「くしゅっ」

風に撫でられてくしゃみが出た。それで、やっと気がついた。

「あ、あれっ！？」

私、服きてない。ぜんら。

手前を見下ろせば、木製の板がせり出したテラスがある。その一角に、グリーンの物干し竿がかかっていた。私が着ていた黒のキャミソールと革のズボン、それから下着がひらひら、気持ちよさそうに揺れていた。傍らには、逆さまに吊るされた靴もある。

「……あ」

やっぱり誰かに助けてもらったらしい。そう思ったとき、階段をのぼる足音が聞こえてきた。驚いて振りかえる。

「ふっ、服はっ……！？」

とっさにベッドのシーツを身体に巻きつけて、背中を壁に当てて固まった。身を縮めて、ただ、部屋の扉が開くのを緊張して待つ。

扉が開く。入ってきたのは、長身の男の人だった。

「うん？　起きてたのか」
「……え、え、え」
黒と白、ウェイターの制服を着た男性。銀縁の四角いメガネで、その奥にある瞳は細くて鋭い。なんとなく、助けてくれたのは女性だと思っていた。
だって、だってそうじゃないと。裸だし、見られたし、男の人に、裸！
「落ち着け、別に危害は加えない」
「えっ、あっ！」
「昨日の深夜、海辺で溺れているのを見つけた」
「えっ？」
「君のことだ」
銀縁メガネの奥にある目が、より細くなる。
形のいい眉が中央による。少し嫌そうに告げられた。
「初めてみたよ。来訪者（ビジター）と呼ばれる存在をな」
「……来訪者？」
「他所の世界から『落ちてくる』モノのことだ。それより、部屋に入らせてもらうぞ」
短く告げてから、部屋の扉を開いたままに固定した。廊下、床の上に置いた盆を両手に持って、部屋に入ってくる。部屋の中央にある机に置く。
「名前を聞いてもいいか」
「わ、わたしですか？」
「他に誰がいる」
男の人の視線が、もう一段冷たくなった。あたしは慌てて、自分の名前を口にだす。
「ユーイ、です……。え、っと？　あれ？」
「どうかしたか？」
「いえ、はい、ユーイです。わたし、ユーイです」
「くっ、」

うつむいた。広い両肩をくつくつ震わせて、口元には手を添える。
「わかったよ、ユーイな。今のは少し面白かった」
「……あ、はい……」
この人はけっして、大きな声で笑ったり、怒ったりしないのだ。普段から、あまり表情を変えない人なのだ。どうしてだかそう確信した。
「俺はナオトだ。まぁ、よろしく」
「ナオト……さん」
なんとなく、口にすると照れた。
「あ、あのですね。私の、その、服、なんですが……」
「あぁ、君が着ていた服は、洗濯してベランダに干してある。海水にどっぷり浸かっていたからな。一応、熱湯を浸したタオルで大雑把に拭いたがな、起きなかったので、そのまま寝かせておいた。シャワーを浴びたければ、下に降りて自由に使うといい」
「え、あ、はい――って、あのっ！！」
「うん？」
ナオトさんが、首を傾げていた。あたしは、聞かない方がいいかなと思いつつ、思い切って聞いてみた。
「み、みましたかっ！？」
「なにを」
「……です」
みのむしみたいにシーツを包めて、顔だけ出して聞いた。ナオトさんがまた、両肩を震わせて笑った。
「食事はここに置いておく。扉の先に、服とタオルは置いておくから、食事を先にとるか、下に降りてシャワーを浴びるかは、好きに決めるといい」
「え」
「じゃあな」
短く、テキパキ告げて、ナオトさんは部屋から出ていった。
私はしばらく動けずにいたけれど、不意に、お腹が鳴った。

「……うー」
顔が熱い。ひたすらに火照っていた。
シーツに包まったまま、どきどきしながら一歩、床を踏んだ。すると、きしんだ樹の音が小さく鳴いた。
冷たい水滴がついたグラスを手にとる。喉が急に渇いた気がして、側に置いてあったストローを入れて、透明な水を吸い上げた。
「おいしい」
水が喉を通ると、食欲がわいてきた。レタスとトマトの挟まれたサンドイッチにも手を伸ばして、ウサギのようにシャリシャリ食べた。もうひとつのツナサンドも、気がつけば無くなっていた。これもとっても美味しかった。
「……ナオトさんの手作り」
初顔合わせのはずだった。なのにどうしてか、よく分からないけれど。
「へへ」
銀縁メガネで、ちょっと目つきが怖くて、長身で、エプロンが妙にちぐはぐで。
そんな男の人の手料理だって考えると、何故か顔がゆるんでしまった。

お腹が膨れたあとで、シャワーを借りた。熱いお湯をたっぷり浴びて、塩水を洗い落としたあと、一緒に流されていた黒のキャミソールと、革のズボンに足を通した。どこか物足りなさを感じたけれど、それがよく分からない。
「うーん?」
なにか、背中がすーすーする。
「あ……。剣が無いんだ。そうだ……」
釈然としないものを感じつつも、私は平らげたお盆を持って、このお店の表に繋がっている廊下を歩いた。
一階の表は、海の見える、小さなカフェだった。店内の席は、十

にも満たないけれど、テラスに出たところにも、いくつか小さな机と椅子がある。黒と白のウェイターの服を着たナオトさんは、部屋の端にあるカウンターの後ろで、グラスを拭いていた。パチ、と目が合う。
「ご、ごちそうさまでしたっ」
「あぁ、盆を持ってきてくれ。洗うから」
「はい」
言われた通りカウンターまで持っていく。カウンターの内側は、小さな調理台と流しになっていた。空いたお皿とグラスを一つずつ手渡すと、水道のじゃぐちをひねって、あふれた水につけていく。私をちらっと見て、冗談めかして笑みが来た。
「よしよし、全部食べたな」
「お、おいしかったです。あの、ナオトさん」
「なんだ」
「私の側に、剣が落ちていませんでしたか」
「剣？」
流れる水が止まる。スポンジを手に、洗剤をつけていく。
「あっ、お手伝いします」
「構わない。それより君が、剣を持っているのか？」
「は、はい。確かバルムンクっていう、えーと、大きめの剣です」
私がそう言うと、、ひとつ、呆れたようなため息を漏らした。
「……ヨーロッパの英雄が持つ剣を、ユーイが持っている理由が知れないな」
「ヨーロッパ？」
「大陸の名前だが。そんなことも忘れたのか？」
「い、いえ……。その剣のこと、名前ぐらいしか知らなくて」
私がしどろもどろ言うと、ナオトさんはお皿を洗いながら教えてくれる。
「竜殺しの英雄、もしくは悲劇の英雄とも呼ばれる、ジークフリートだ。とある二人の国の王子から奪ったり、授かったりしたとされ

ている」
「……どっちなんですか？」
「諸説ある。元は、遊牧民族が広げた民話から広まったものだったり、それを劇場作家が新たに作りあげた、シナリオの一説だったりと様々だ」
洗い終えられた食器が、食器立てに、整然と並べられた。
「少なくともユーイは、俺にはいたって普通の、現代アジア人に見えるがな」
それからまた、小さく両肩をふるわせて笑った。
「驚いたよ」
「な、なにがです？」
「波打ち際で溺れてたのは、男子学生かと思ったからな」
「え！」
「近づいてみて、男にしちゃ、やけに綺麗な顔をしているなと思った」
ナオトさんがそう言って、やんわりと笑った。顔から火がでそうになる。
「胸もなかったしな」
「うぐっ！」
最後の一言は致命的だった。とっさに、自覚のある平たい胸を隠してしまう。
「ややや、やっぱり、見たんですよねっっ！？」
「不可抗力だ。それはともかく、ユーイがよければ、すぐにでも出かけたいんだが」
「出かける？　どこにですか？」
「役所」

05

それから一時間もせずに、私たちは店の外に出ていた。エプロンを外したナオトさんは一度自室に戻ってから、代わりに薄手のジャケットを一枚着て、下もボトムズに履き替えている。鍵をいくつか取りつけたキーホルダーを手に、玄関の扉を閉めた。

庭、と呼べるほどの小さな駐車場には、一台の白い自動車があった。ナオトさんはまっすぐ歩き、私は靴に足を通してから、お店の後ろに広がる海に見入っていた。

（……なにがあったんだろう）

青空にかけられたようにも見える大橋の中央は、すっぱり斬り落とされている。下には巨大なうずしおが巻いて、それより先には、無人島らしい、緑がこんもり盛られたように見える、小さな島がぽつんとあった。

「ユーイ」

「あっ、すみません」

振りかえると、ナオトさんがちょうど、自動車の中に入っていくところだった。軽く走って後を追いかけ、助手席に乗せてもらって扉を閉めた。

「シートベルトしとけよ」

「はい」

しゅるりと伸ばして、かちんっと閉める。同時にナオトさんがキーを回すと、ブォロロロ……とエンジンの音がひびいた。

「まずは役所に行って、ユーイの『来訪者』の申請をする。たぶん、これは結構時間がかかる」

「はい、あの、」

「質問はあとで」

「す、すみません」

ガコン、とサイドブレーキが落ちて、ギアが「D」のところに合

った。自動車がゆっくりと前に動きだす。
「それでも昼前には終わる。ただ、できた書類を受け取るのに、もう一度行くことになるからな。その間に買い物をすませて、ついでに食事も外で済ませてしまおう」
「あ、あの、お金は……」
「それもひとまずは、役所でどうにかなる」
「え？」
「まぁ、いけばわかるさ」
自動車は、緑に挟まれた細い小道の、ゆるやかな坂をのぼっていく。
「俺からは以上だ。質問があれば受けつける」
ナオトさんの口調は、どこか「先生」みたいな印象があった。ハンドルを少しずつ動かして、三又の道に来たところで軽くブレーキを踏む。少し錆びた看板が目に留まって、そこには「海の見えるカフェ」と書かれていた。
「あの、今から役所に行って、なにをするんですか？」
「ユーイが、来訪者（ビジター）だということの申請だ」
「質問です。来訪者って、どこからどこまでを指すんですか？」
カッチ、カッチ、カッチ。指示器の音が三度して、分かれ道を左に進む。
「来訪者は、異世界からおとずれた者の総称だ。大方にして、記憶が曖昧なことが多い」
「記憶が曖昧？」
「あぁ、たとえば君は、異世界のどこから来た？」
「あたしは……えぇと……」
ゆっくりと、自動車はスピードを上げていく。まっすぐな直線に、前にも後ろにも、他に走る車の影は無い。
「……アナザー、ワールド？」
「異世界だな」
ナオトさんの言うとおり、私の記憶は曖昧らしかった。

私の座る助手席の左手には、変わらず一面の海が広がるばかりだ。流れていく雲と同じ方角に、出てきたばかりのカフェが見えた。よく見れば、そこから石の階段が並べられていて、下にある砂浜まで降りていけるらしかった。
「ユーイを拾ったのが、そこの砂浜だ」
私の視線に気がついたのか、ナオトさんがまっすぐ前を見ながら、そう言った。
「昨日の深夜に、久々に夜釣りに出ていてよかったよ」
「へぇ。釣りするんですか？」
「たまにな」
ちょっと意外だと思ったのが通じたのかもしれない。ほんの少し苦い顔をされた。
「父親が好きだったんだ」
「ナオトさんのお父さんですか？」
「他に誰がいる。まぁ、今はもう亡くなった」
くるっと、ハンドルを右に傾ける。道に沿ってゆるやかなカーブを曲がる。その先は急になっているのか、白いガードレールが見えた。黄色い看板には「スピード落とせ」と書かれている。その遥か向こう、まぶしく輝く、初夏の陽ざしが見えていた。

役所までは、途中、赤信号にひっかかりながらで十五分ぐらいかかった。結構、大きな駅や建物なんかも見えたけれど、不思議と人気が少なかった。シン、としていてまるでゴーストタウンのようだったし、来るまでにすれ違った自動車も数えるほどだった。
「さ、行くぞ」
「はい」
私たちは自動車から降りた。
役所の広い駐車場もまた、ほとんどガラ空きだ。入り口に改札機はあったけど、常に上を向いていて、もう使われていなかった。
「あの、ナオトさん、今更なんですけども……」

「どうした」
「お店の方は、いいんですか？」
「本当に今更だな」
後ろ髪を一度ひっかいて、ナオトさんが面倒くさそうに言った。
「店があるからって、放っておくわけにはいかんだろ。ほら、はやくこい」
「は、はいっ」
歩く速度がはやいナオトさんの後ろを、私も小走りになって、急いで追いかけた。
自動扉を抜けると、ひんやり涼しい風が流れてきた。冷房がちょっと強いかなと思ったけれど、耐えられないことも無い。ただ、一枚上着があればよかったかも。そんな風に思いながら案内窓口のほうに近づいた。
「誰もいませんね」
「基本的に人いないからな、田舎だし」
さらっと、ナオトさんが告げた。『ごようのある方は押してください』と置かれた呼び鈴を押すと、

ちゃらりらりらぁ～♪

妙なメロディーが流れた。でも、誰も来ない。
「あの、ナオトさん……。この町って大体、人口どれぐらいいるんです？」
「確か８００人ぐらいはいた気がする」
「えぇ！？　少なすぎじゃないですかっ！？」
「田舎だからな」
確かに田舎だけど。それにしても、少なすぎじゃないだろうか。
一応、車が走れる道路とかもできてるのに。駅とかもあったのに。
「あの……。人口密度は、どうなってるんです？」
「確か、平方キロで、二人」

「平方キロで二人っ！？」
それは、なんというか……。
「ド田舎ですね」
「頭に超をつけてもいいぞ」
超ド田舎。なるほど、納得した。
私が、深く深く、頷いたときだった。遠くの廊下から、急いで駆けてくる足音が響いてきた。
「いやぁー、すんませんなぁ。ちょぉ、裏手の畑で土いじりしとったもんでしてなぁ」
麦わら帽子をかぶって、ラフなアロハシャツとショートパンツをつけた、たぶん役員さんらしい人が現れた。私は悲鳴をあげて、ナオトさんの後ろに隠れる。
「あれまぁ、ナオトさんやないですかぁ」
「どうも」
「こちらで見んのは、ひさびさですなぁ」
「えぇ、今日はちょっと用事がありまして」
「ようじっつーと？　おんやまぁ……」
カタカタ、カタカタ、カタカタカタカタカタ。
骨が、骨が、ほねが、ホネがほねほねっ！
カタカタ顎骨を鳴らしながら、空洞の瞳で、私を見つめた。
「こんにちはぁ、ワシ、この町の役所で働いとる、輔狭間壬生一郎（すけはざま みぶいちろう）、言います。長い名前なんでなぁ、皆からは、すけさん言われとります。どーぞよろしゅうに」
骨のヒトこと「すけさん」は、麦藁帽子を手に、紳士のように、しゃれこうべを下げてみせたのだった。

06

私とナオトさんは、小さな応接間に通されていた。オレンジジュースの入ったグラスを無言でちびちびやっていると、
「いやー、たいへんお待たせして、すんませんでしたなぁ」
扉が開いて、すけさんが入ってくる。私はぎくりとしてしまったけれど、ナオトさんは「いえ、こちらこそ突然すみません」と、ご近所のおじいちゃんの家に、お邪魔したような感じで言った。
「来訪者さんが来はるなんて、久々やもんね。用紙とペン、どこやったか、忘れてしもうてなぁ」
すけさんが、カタカタ笑う。骨ばった、というか、骨しかない指先を伸ばして、長机の上に一枚の紙を置いた。
私はできるかぎり、すけさんを目に入れないようにしながら、その紙の見出しを見た。

『　キャラクターステータス・詳細表（プロフィール）　』

一番目立つように、太字で書かれていた。掴んでいたオレンジジュースのグラスから手を離して、となりにいるナオトさんに尋ねる。
「あの、これ、なんですか？」
「来訪者が、この世界に訪れたさいに表記する用紙だ。名前と、住所……は」
「まだ空欄でええですよ、昨日、この世界に来たばっかりなんやろ？」
正面のソファーに腰かけた「すけさん」が、カタカタ言う。麦わら帽子の紐が、のど骨の一部に上手にひっかかって、しゃれこうべの後ろで揺れていた。
「ユーイちゃん、やったっけ？」
「は、はいっ！」

「この用紙はな、記入して、上に処理してもろたらな、住民票としても扱われるんや。後から何かの処理して欲しいときは、この用紙に記入したのと同じ住所書いたらええさかい。もし、歳足りとったら、車の免許証なんかも発行できるけど」
「わ、わたし、まだ十六歳ですからっ！」
「あぁ、せやか。ほんなら、原付なら――って、車の話ばっかりしてごめんな。おじさん、すぐ話し脱線してしまうんでなぁ」
カタカタカタっと、陽気にしゃれこうべが揺れる。
なにか少しずつ慣れてきて、気がつけば、私も愛想笑いなんかを返していた。
「ま、そんなわけで住所のとこはおいといて。名前・性別・年齢・連絡先、は……」
「連絡先は、まぁ、ひとまず俺のところで構いませんよ」
「ほな、現住所もひとまず、ナオトの店にしといたら、ええんちゃうん？」
「それは……」
すけさんが、ナオトさんを見る。私もなんとなく、ナオトさんを見た。長くは持たずに、部屋の中にため息がこぼれた。
「……わかった」
ナオトさんの敗北宣言に、私の笑い声と、すけさんの笑い声も重なった。
「ユーイちゃん」
すけさんが、前かがみになって、両手を前に出してきた。なにを望んでいるのか分かったので、私はまだ少しためらいつつも、勢いよく、
『いえーっ』
手を打ち合わせた。
「えー、ほな、住所がひとまず落ち着いたところで、この下の説明書きに移るんやけど」
「はい」

用紙の半分以上、というかむしろそっちが本番というように、なにかあまり目にしたことのない単語が並んでいた。
「レベル・クラス・基本攻撃力・魔力・属性抵抗値、潜在適正、種族傾向、固有スキル……えーと、最後は、危機的状況に発動する最終奥義？？？」
「あー、ぶっちゃけ、その辺りは、おじさんにもよくわからんなぁ。ただ、一応規約やけんね。全部埋めてもらわんといけくてなぁ」
「でも、なにを書けば……」
特に最後。最終奥義って言われても、その、困る。
「あ、それはなぁ、これ使えば書けるらしいから、お手数やけど頼んます」
そう言って、すけさんから、一見普通のボールペンを渡された。
「あんま深く考えんかったら、とりあえず、書けるらしいから」
「わかりました」
すけさんからペンを受け取って、やっぱりちょっと迷いながらも、レベルの項目のところにペン先を落としてみる。
「あ、あれ？」
手がスラスラと動きだした。
勝手に、なにも考えず、用紙の項目を埋めていく。

レベル・４５
クラス・勇者
基本攻撃力・１４２　魔力・２０８
属性抵抗値・光を吸収、闇に弱い
潜在適正　・剣と光魔法
種族傾向　・潜在能力高し。ただし、成長率・要素ともに不安定
固有スキル・やや周りに流されやすい
……。
危機的状況に発動する最終奥義・若さゆえの……。

「最後が気になるな」
「最後が気になりますなぁ」
「私だって気になりますっ！」
なんだろう。若さゆえの、
「『あやまち』か？」
「あの、書き直しってできないんでしょうか」
「無理ですなぁ。ほな、残りの住所んとこの記入も、お願いしますわ」
私は諦めて、ナオトさんに住所を尋ねて、未記入のところもすべて埋めていった。最後に、すけさんに用紙を渡す。
「ほい、ごくろうさまでした。ほな用紙は受理しとくんで、お上の方から認可が返ってきたら、ナオトさんのケータイに連絡しときますんでなぁ」
「あの、お上って？」
「魔王様ですわ」
カタッ、カタッと、少し歯切れ悪く、すけさんが言う。
「この町をおさめる、魔王いう方がいましてな。そのひとんとこに、この書類をお送りするんですわ。なに、夜になる前には連絡くるでっしゃろ」
（魔王……）
その三文字は、なにか、私の心臓に突き刺さるようにして沈んでいった。

役所を後にしたら、お腹が空いた。まずはお昼にしようということで、すぐ近くにあった、回るお寿司屋さんに入った。ここの駐車場もまたガランとしていた。自動車を降りてから、お店の自動扉を抜けると『いらっしゃいませ』という電子音が響いてきた。
「あの、えーと、わたし、自分の分は払いますのでっ」
「そうしろ。まさかおまえが、金持ちだとは知らなかった」
「え、えへへ……」

まったくもって、その通りだった。
役所を出るさいに、すけさんが例の用紙を大きな機械に入れて「ぽちっとな」と言って送信した。すると、変わりに一つの通帳が吐きだされてきたのだった。
「これは、先に渡しときますんでな。当面の生活資金になるやろうから、大事に使いなさいなぁ」
お礼を言って受け取ったあと、中を開いてみた。最初の一ページの、一番上の項目のところに、早速入金された額が記されていた。
「６８０２９８３１」――六千八百万、ゴールド。

「マグロ！　タイ！　カツオ！　カンパチ！　イカ！　タコ！　ヒラメ！　大トロー！」

「……いきなり気が大きくなったな」
「魚介類は大好きですから！」
席についた私は妙に開きなおり、無人でひたすら出てくる寿司ネタを、ばっくばっくと食べまくった。出るときに、通帳を通して扉を開けたら、四千ゴールドぐらいが引かれていた。
その後も、コーヒー豆の専門店や、パン屋など、カフェのメニューに必要な物を買ったり、小さなスーパーマーケットで、明日のご飯や日用品なども買い込んだ。どのお店も無人だったけれど、品物は不思議としっかり揃っていた。ナオトさんはそのたびに、通帳を無人のレジに添えて、ピッ、ピッ、と買い物を手早く済ませていった。
自動車のトランクが大分いっぱいになってきたところで、不意にナオトさんが言った。
「そうだ、ユーイ、服なんかは買わなくていいのか」
「えっと……」
改めて、自分の格好を見下ろしてみる。上は黒いキャミソール一枚に、下は革の長ズボン、靴もゴツいスニーカーで、なんというか、

年頃の女子っぽくない。
（だけど）
車の窓ガラスに映る自分の姿は、割と、それでも似合っていると思う。髪質も硬くて、ぜんぜんふわっとしてないし。身長ばかりが伸びて、ひらりとしたスカートを履くことに抵抗を覚えたのは、いつからだったろう。
「仕方ないな」
「え？」
ナオトさんの手が、私の頭の上に乗った。驚いてそっちを見たのと同時に、車が発進した。
「ガマンしてますって顔、そんなに露骨にされたらな」
「す、すみませんっ」
「謝るな。子供は素直が一番だ」
ははっと、ナオトさんが今日初めて、声にだして笑った。
子供じゃありません。
そう言いかけて、せめてもの抵抗に口を閉ざした。

07

市内から少し外れた、路地のところ。目立たない通りにあった可愛らしい洋服のお店を、私は何故だか知っていたような気がする。
「ナオトさん、ナオトさん。どれが可愛いと思います？」
「……あのな」
私は半ば強引に、ナオトさんも連れて、おしゃれな、小さな洋服店に入っていた。並ぶ洋服はすべて女性向けで、ハンガーにひっかかったままの、フリルのたくさんついた洋服やスカートを、とっかえひっかえ、自分の前に添えていた。
「ユーイ、悪いが、俺は車で待ってる」
「ダメですよ。こういうのは客観的な視点が必要なんですからっ」
「……男の客観的な視点は、一番当てにならんと思うが」
店内には下着や水着なんかも並んでいる。そしてこのお店も無人だった。自動レジのキャッシュが置かれているだけなのに、不思議と商品だけは揃っている。それでもナオトさんは、目のやり場に困っているようだった。
「俺は外に出てる。時間をかけていいから、ゆっくり選べ」
「あっ」
逃げられた。後ろ姿を見て、可愛い人だなぁと思った。
「試着してみよう」
奥にある試着室に服を持って入る。カーテンを閉ざして、正面の鏡に向きなおると、
「……？」
そこにはなにか、三頭身の、極端なデフォルメを施されたキャラクターが映っていた。男の子にも女の子にも見えるキャラクターは、横になって目を閉じていた。眠っているようにも見え、同じようにデフォルメされた、黄金の鞘に閉ざされた「剣」が落ちていた。
「なに、これ？」

首を傾げて、もう一歩覗き込んだとき、鏡の下のほうになにかが表示された。

マナ「ユーイ、ユーイっ、どしたのー、起きてよ～っ！」
マナ「寝落ちしちゃったの？　ユーイー」
マナ「……うぅ、電話したいけど、下手に寝てると起こしちゃう？　ユーイのお父さんも、お仕事してるかもだし……」
マナ「でもおかしいなぁ。寝落ちしても、『バーチャル・ギア』はちゃんと読み取って、
　ログアウトさせてくれるって、書いてあったんだけど……」
マナ「ユーイっ、こっちはもう、プレイ時間一時間すぎて、ロスタイム入ったよ～っ！」
マナ「私の『バーギア』も、警告だしてきたから落ちるよ？　落ちちゃいますよ～？？」
マナ「一応、ケータイにもメール入れとくね。ちょっと心配だから、明日の朝練の時間、
　お兄ちゃんに聞いて、ユーイが起きるかなって思う時間に電話かけるね」
マナ「ごめん、寝てるとこ、邪魔してたらごめんね。じゃあね！」
マナ「あっ！　ユーイ、もし起きて聞いてたら、ちゃんと『バルムンク』拾ってね！
　落としたままログアウトしちゃうと、所有権無くなって消えちゃうぞ～！
　すーごい、偶然にでた「激レア」だもんね。確かこの前、六千万で取引――」

「マナ」さんが「ログアウト」しました。

画面下に見えていた一覧のメッセージが、一息に消去されていった。残ったのは、相変わらず三頭身のキャラクターと、小さな剣だ

け。
「……マナ？」
なにか、その言葉がひっかかった。その彼女が私のことを呼んでいた。
画面の中で眠る、三頭身のキャラクターと自分を見比べると、着ているものはそっくりだった。硬くてツンツンしてそうな、まっくろの短い髪もまた同じで。唯一に違うところがあるとすれば、
「……バルムンク」
私は鏡の中に映る、黄金の鞘に入った剣に手を伸ばしていた。
鏡に、ちょん、と指先が触れると、
『――バルムンク。
ユニークレア（アイテム化、可能限度数１）
基本攻撃力１０６５・属性光・勇者のみ装備可能。
現在の価格は６，８００，００００ゴールドです。購入しますか？』
「ろ、六千八百万！？」
それはつまり、私の通帳の預金残高の、ほぼすべてだ。回るお寿司をいっぱい食べたから、コレを手に入れれば、残高が、えーと……。すごく悲しいことになる……。
伝説の剣を買うか、カワイイ服を山ほど買うか。もちろん後者に決まってる、んだけど、
ちゃんと拾ってね、消えちゃうよ！
『マナ』の言葉が、頭のなかに残ってた。気がつけば、鏡に向かって両手を伸ばしてた。
両手を鏡の中へと沈み込ませていく。
指先から、手の甲へ、手首へ、腕の先へ、二の腕へ。

それから何かを掴んだような感触があった。引き摺りあげる。深い泉の底に横たわり、眠りを告げていたような、その感触を持ちあげる。

「……ッ！」

柄に、透明感のある蒼い宝玉が見えたとき、さらに、実物を掴んだという感触が増した。綱引きをするように、体ごと後ろに引いていく。装飾の施された握り手が終わり、いよいよ刀身が姿を現した。

内に静かな炎を宿すように、波打つような蒼が、ずるりと、来た。

「……買っちゃった」

おそる、おそる、通帳を見る。やっぱり、六千八百万ゴールドが引かれていた。

店から出てきた私をみて、ナオトさんが開口早々に言ってきた。

「……服を買いに入ったんじゃ無かったのか？」

「その、なにか思うところができまして……。伝説の剣を買ってしまいました。あの、それで残高も一気に無くなってしまってですね」

「いくら残ってるんだ？」

「い、一万ゴールドと少しです」

ナオトさんが、目を細めて絶句した。そして、大きなため息をこぼしてから、

「ユーイ、もう少し後先のこと考えろ」

「はい……」

まったくもってその通りだった。私がしょんぼりしている間に、ナオトさんは車のトランクを開けた。やれやれとばかりに、片手を伸ばしてきた。

「よこせ、とりあえず邪魔だろうから、後ろに乗せとけ、伝説の剣」

「は、はいっ」

黄金の鞘に閉じ込められた伝説の剣を、ナオトさんに手渡すと、

「――うぁっ！？」

手にした肩が、がくんと下がった。あわてて両手で掴みあげよう

とするも無理らしく、そのまま落としてしまう。
「なんだこの重さは」
「えっ重たいですか？」
私は屈み、地面の上に落ちた伝説の剣を拾いあげた。正直、棒切れのように軽くて、まるでオモチャかと思ってしまうぐらいだ。両手に乗せてナオトさんに見せると、じっと覗き込んで来た。
「ユーイ。実はおまえ、とんでもない怪力の持ち主だったりしないのか」
「しませんよっ！」
「そうか。なら一応、慎重に、車のトランクに入れてみてくれるか」
「はい」
剣を斜めにして入れると、ちょうどいい具合だった。トイレットロールの上に置いたときにも、特別に軋むような音を立てることもなく、剣は静かに乗せられた。「どれ」と、ナオトさんがもう一度両手を伸ばす。けれど銀縁メガネ奥の瞳を歪めるだけで、小さく「無理だな」と言った。
「これは、お前専用の剣なのかもしれないな」
「私専用ですか？」
ナオトさんが頷いた。
「あぁ、役所で記述したシートに、クラスというのがあったろう。あそこに表示されたクラスでないと『概念的に』扱えない道具というのが、この世界のルールにあるんだ」
「へぇ～。そういえば、私のクラスってなんでしたっけ？」
「おまえなぁ」
やや呆れた調子の声で言われた。冷ややかにも思える瞳に睨まれると、なにか胸が高鳴る私は、どこかネジが外れかけているのかもしれない。
「それぐらい覚えておけ。勇者だろ」
「あの……、勇者って、なんですか？」
私の記憶はどうにも曖昧だった。けれど、その単語はいっそう、

なにか、もやもやとしている感じだった。ナオトさんは特に答えてはくれず、代わりに青い携帯電話を、ズボンのポケットから取りだした。
「すけさんからメールだ。ユーイが住民になる承認が降りたそうだ。いちど、役所に戻るぞ」
「あっ、はい」
ナオトさんが運転席に乗り込んで、私も助手席に座った。シートベルトを締めていた時に、
「勇者ってのは、」
「えっ？」
言うか、どうか、迷っている感じだった。
キーを回し、エンジンをかける。その音に紛れるようにして、ぽつりと言った。
「男なら、誰もが一度は憧れるんじゃないかな、そういうのに」

役所に戻ったら、すけさんがいた。相変わらず麦わら帽子に、アロハシャツという変わらない格好だった。
「おかえんなさい。住民票、できてまっせ」
「ありがとうございます」
私は、すけさんから住民票を受けとった。
「どやったかね、買い物は」
「えっ？」
「いやぁ、ユーイちゃん、えらい金持ちやったからなぁ、かわいい服とかぎょーさん買うたんやないかて、思うてなぁ」
「……そ、それがですね」
「うん？」
私が言葉をにごして、ナオトさんのほうを見ると、少しイジワルに笑っている顔とぶつかった。
「今はほとんど、無一文になりましたよ」
「へ？　もしかして、家でも買うたん？」

「いえ、その……。伝説の剣を買ってしまってですね……」
「伝説の剣？」
すけさんの首が、カタカタ鳴った。
私が洋服店の鏡の向こう側で、不思議な三頭身のキャラクターと、伝説の剣が落ちていたことを告げると、すけさんはまた、カタカタカタカタ、骨を響かせた。
「ユーイちゃん、その店の場所、詳しく教えてもらえんやろか」
「えっ？　いいですけど……」
すけさんの様子に、今さらに、ちょっと怖くなってたじろいだ。
私は簡単に手書きしたメモを渡してから、あとはそのまま役所を後にした。

ナオトさんのお店に帰ってきた時には、夕方の手前、ぐらいの時間だった。車に乗せた日用品を運び終えてから、私はカウンター席に座らせてもらって、一息ついていた。
「成り行きになったが、今日からしばらく、よろしく頼むぞ」
「こ、こちらこそご迷惑かけますっ」
私が深くおじぎをすると、ナオトさんは不意に笑った。
「ユーイは十六歳と言ってたな。元の世界では学生だったのか」
言われて考えた。『学生』という言葉がなにか、妙にしっくり来たけれど、自分が学生だという記憶を探っても、靄がかかるばかりだった。
「ここは超ド田舎だが、一応、学校も無いことは無い。行くなら手続きしとけよ」
「あの、でも、学費が払えない気がします……」
「伝説の剣なんぞ買うからだ」
「す、すいません……」
隣に立てかけた「バルムンク」を一目見て、途方にくれた。
「あのー、伝説の剣って、クーリングオフ効きませんかね」
「無理だろうな。六千八百万を、現金一括払いで買ったバカが悪い」

「で、ですよねー」
やっぱりダメだった。
「しばらくここにいてもいいが、とりあえずは、働くところを探さないとな」
「はい、あの、この世界ってどんな仕事があるんでしょうか」
「なんでも構わない」
「えっ？」
「ユーイがやりたいことを、仕事にすればいい。必要最低限の道具は店にすべて揃っているからな。役所に申請すれば、大体は通る」
「そ、そう言われても……」
すぐには浮かばない。私がぐずぐずと答えあぐねていると、ナオトさんが、コーヒー豆の袋をとりだして、鋏で封を切った。
「一つ聞いてもいいか、ユーイ」
「は、はい。どうぞ」
「ユーイは、元の世界に帰りたいとは思わないのか？」
「元の世界？」
「君がいた世界だ。あるべき処に帰るというのが、自然だと思うんだがな」
「それは……」
ざらざらと、コーヒーミルに豆が注がれていく。ナオトさんは、手回しで直に豆をけずった。細かに分断された豆の粉が、スイッチを一つ押されて、ぽた、ぽた、っと黒い雫になって落ちてくる。
（私は元の世界に帰りたいのかな……。というか、どういう生き方してたんだろう？）
考えてみたけれど、霧のような想いが立ち込めるばかりで、形にならない。
「帰りたくないのか？」
「わかりません……」
つぶやいた自分の声は、本当に情けなかった。これから先、どうすればいいのか分からずに、感情だけが積もってくる。目元に熱い

ものが浮かびそうになる。
「悪かった、べつに責めているわけじゃないんだ」
「あ、その、いえっ」
「だが一つ言っておくと、タダ飯を食わせるつもりは無い。働かざるもの、食うべからずだ」
「はい、あの、私、まだなにも分からないことだらけですけど、えっと、その、お夕飯の用意を手伝いますっ！」
身を乗り出すように言ったら、ナオトさんが虚をつかれたような顔をしていた。
広い両肩がふるえる。
「本当に面白い奴だな。君は」
優しい顔で笑ってくれた。
私は、この瞬間にたったひとつ。求めたいことが、思い浮かんだ。

夕飯を食べてから、寝る前に、ナオトさんに誘われて、二人でテラスに出た。夏の気配があるとはいえ、外は意外と肌寒い。
天頂には、星がたくさん輝いていた。ここのカフェは、町の中央から距離があるし、小高い丘のうえにあるせいか、星がとてもよく見えた。その光に混じり、地平線の手前には、ライトアップされた大きな橋もまた、海の真ん中にそびえている。
「ナオトさん、あの橋は……」
「瀬戸大橋だよ。本州と四国を結んでいた」
温かいココアを口に含みながら、ナオトさんが答えてくれる。
「まぁ、今では見ての通りだが」
橋の途中が大きく崩れ落ち、分断されている。そして朝方に見た時と変わらず、絶えず巨大な「うずしお」が、崩れ落ちた橋の下で回っているのが、闇の中に見てとれた。
「あそこで、なにがあったんですか？」
「魔王が、結界を張ったときに破壊したらしい」
「……えーと？」

意味が掴みきれず、聞き返すような形になってしまうと、ナオトさんが苦笑した。
「この日本では、少し前まで、人間とまものによる戦争が起きていたらしい」
「まもの、というのは……？」
「魔王が作った命だ。役場のすけさんなんかが、そうだな」
「なるほど。あの、つまり、みんな骨……というわけですか？」
「まぁ、いろいろだ」
どこか言葉を濁して、ナオトさんが言った。
その「いろいろ」を想像しながら、私も一口、甘くて熱いココアを飲んだ。
「ナオトさんも、まもの、だったりします？」
「さて、どうだったかな？」
珍しく、こっちをからかうように見てこられたから、少し焦った。
「もしかして、私と同じ来訪者（ビジター）ですか？」
「違うな。俺は単なる村人だよ」
その言い方が面白くて、つい笑ってしまった。ナオトさんが立って、お店に続くガラス扉に手をかける。
「戻るぞ。そろそろ冷えてくる」
「はい」
私たちは空のマグカップを手に、店のなかへと戻っていった。
マグを片付けてから、階段をのぼった。
「おやすみ、ユーイ」
「はい、おやすみなさい」
ナオトさんが開いた扉の、向かいにある部屋に入る。私が仮住まいをすることが許されて、今朝も目を覚ました部屋だ。パジャマに着替えてから、明かりを消した。ベッドに横たわると、小さな欠伸がこぼれて、すぐに眠たくなってきた。

08

音が鳴っていた。鳴りまくっていた。
小さな机の上においた目覚まし時計が、騒ぎまくる。
「……朝練！」
跳ね起きた。六時十五分。
十五分も律儀に鳴り続けていた頭をポンと押す。部屋を出ようとした時に、今度は携帯が震えた。画面を見ればメールが一件。
『おはろー。体調の方は大丈夫？』
珍しい、どうしたんだろう。
やや天然性物質の入った、リス娘のメールに返信する。
『おはよう、大丈夫だけど』
携帯を持って廊下にでると、もういちど、真奈からメールが来た。
『よかた。わたし、ねる』
「……カタコト言葉の外国人か？」
ちょっと吹きそうになりつつ、階段を降りていく。ペンが紙を引っかく音を聞いて、一階に降りて居間に行くと、原稿用紙の大海原が広がっていた。
「お父さん、おはよう」
「ん、おはよう」
昨日の寝る前の服装と同じ。頭には、髪と同じてぬぐい、白いシャツ一枚、短パン一の格好で、黙々と手を動かしていた。
「新作完成しそう？」
「ん、探偵の推理が正しいかを考察中」
「大詰めだね」
「だよ」
赤い印をたくさんつけた一枚が、机の脇にどけられる。それを見やってから、台所のほうに行くと、大きめのステンレス鍋がコンロの上に置いてあった。今日の朝食当番は父なので、中にはうどんの

出汁でも入っているのかと覗き込めば、
「……雑煮？」
六月の終わり、もうすぐ夏も近いこの時期に、雑煮。お正月に一度食べると、それだけで割と満足してしまえる食べ物が、私の目の前でたゆたっている。
「お父さん、このお餅どうしたのー？」
「買った」
「いや、そりゃ買ったんだろうけど。賞味期限、大丈夫なの？」
「昨日の深夜に買ったばかりだからね。たぶん平気」
それなら大丈夫かと、かるく最加熱してから、お椀についだ。
「あっ、意外とおいしい」
お雑煮は、醤油とかつおで、しっかり下味を整えてあった。少し濃いめの出汁が、味の薄いお餅と、大根や人参にもちょうど合う。タッパーに入れたあった刻んだネギを振りかけて、お箸を持って父の向かいに座った。
「おとうさん、昨日は完徹？」
「ん、調子よかった」
白髪と皺がだいぶ増えた顔を、少し崩して笑う。口元には禁煙パイポが咥えられていた。基本的にヘビースモーカーの人だけど、部屋で吸うと、主に私が嫌な顔をするので、室内ではカリカリとそれを噛んでいた。
「お父さん、今日はお昼から、伯方島の方まで取材に行くんだったよね。車で行くの？」
「バスだね。車内で睡眠確保の予定」
「気をつけてよ。お父さんって基本的に、ふらふらしてるんだから」
「肝に命じます」
原稿用紙に向き合ったまま、そう言った。本当に大丈夫かなと思いながら、私もお雑煮を食べ終えた。
土曜日の朝練は七時半からはじまって、十二時になるまえには終

わる。こまめに水分補給を行いながら、あたしたちは河川敷の土手を駆けていた。
　高校の陸上部は、全体的に弱小だった、土曜日でも、校舎は野球部やサッカー部のものだ。そんなわけであたし達はいつも、河川敷に集まって走り回った。
「短距離、中距離の連中は集まりなさい。これから二百を七本。飯田は長距離を指揮」
「聞いたかー長距離部隊、今日は三キロコースだ。全員、時計わすれんなよ」
「あっつーい、休憩五分伸ばしてぶちょー」
「伸ばせば伸ばすほど、つらくなってくんぞ。おら立て」
　三年の部長が声をかけると「しぬー、おうち帰りたいですー」と文句を言いながらも、部員が連れられていく。私はそれとは逆に、岸田先生の方へと向かう。白の半袖ジャージを着て少し汗をかいたのか、いつもの銀縁メガネを外し、黒髪には少し汗の雫が浮かんでた。
「日野」
「んぐっ！？」
　斜め後ろから盗み見していたら、いきなり名前を呼ばれた。口に含むだけに留めておいたポカリが、うっかり喉の奥に入りかけて軽くむせた。
「なにやってるんだ」
「すみませんっ、なんでしょうかっ」
「体調は大丈夫か、と聞こうとしたんだが」
「ぜ、ぜんぜん問題ありませんっ！」
　とっさに言うと、岸田先生が少し笑った。
「無茶だけはするなよ」
「はいっ！」
　やるき、でてきた。

正午になって練習が終わったあと、真奈からメールが届いているのに気がついた。
『高校の図書室なう』と書いてあったので『シャワー浴びてから行く』って返事をしておいた。
高校の「シャワー室」は、二年前に校舎を改築したときに作られたばかりで、正直ここがないと干からびて死ぬんじゃないかって思う。そして今の三年生が、二年前の話を語るとき『夏場は、家に帰るまでが遠足という名の地獄だった……』と、どこの運動部も、しみじみ語っていた。
「――お、日野じゃん」
シャワー室に向かう廊下の途中、見知った茶髪の男子が、こっちに向かって歩いてきた。
「新元、くん」
彼もシャワーを浴びてきたのか、髪が少し濡れていて、うっすら、シャンプーの匂いがしている。
「おつかれさん。きっしーにしごかれた感じ？」
「そんなこと無いよ。先生は、ちゃんと休憩取ってくれるし、私たちのことも見てくれてるよ」
「そっか」
私の隣に座る男子だった。昨日、岸田先生にアホなことを言って、チョークを投げられていた人だ。女子のなかではやたらと背の高い私と、同じぐらいの背丈がある。確かバスケ部に入ってたと思う。
「日野ってさ……。いや、なんでもねーや」
「うん、じゃね」
すれ違う。今日は日差しが強くて、はやくシャワー浴びたいなって思ってた。
「あのさぁ、日野」
「なに？」
名前を呼ばれて足が止まる。振りかえったら、新元が頭の後ろをかきながら、言ってきた。

「ゴゴ、ヒマ？」
「へ？」
「だからさ、午後から時間空いてねーかな。こっち、仲間うちで昼メシ食いに行こうっつってんだけど」
「そうなんだ、いいね」
「あー、うん。で、一年の女子マネとかもいるからさ、よかったら」
「ごめん、真奈と会う約束してるから」
「……さいでー」
新元が、もういっかい、口を開いてから止める。少し、間があって、
「んじゃ、また月曜」
「うん」

09

高校の図書室は、冷房が入って夏でも涼しい。ただ、近場に大きな図書館があるせいか、制服を着ていないと入れない学校の図書室は、休日は人が少なかった。今日に至っては一人しか見えない。
「あっ、ゆーい、部活終わった？」
「終わったよ」
参考書を広げていた真奈が顔をあげる。少し茶色味を帯びた地毛が、小首を傾げると綺麗に揺れた。普段はコンタクトだけれど、今日は丸縁の眼鏡をかけていた。髪は三つ編みのおさげ。地味な格好をしていても、普通に可愛いよなぁこいつは、とか思う。
「お兄ちゃんにしごかれたようですな～」
「しごかれました。二百を七本。小休憩はさんで、百を十本はキツすぎー」
「ごくろうさまん」
「ありがと」
椅子を引いて隣に座った。真奈がふと、校舎の窓のほうを向いたので、私もつられてそっちを見た。野球部が、まだまだこれからと言わんばかりに声をあげていた。
「青春だねぇ」
「そだね、倒れなきゃいいけど」
「それ含めて青春じゃない？」
「そんな青春、あたしは断る」
あるていどの無茶が効いたとしても、自己管理は大切だ。日射病でいちいち倒れて病院送りになって、それを青春というのはいくらなんでも違うだろう。
「倒れたら、お兄ちゃんに介抱してもらえるかもよー？」
「……」
「ゆーい。今、少し考えたね？」

「考えてない」
岸田先生から『まったく世話を焼かせやがって……』的な眼差しを向けられつつ、手作りのご飯を食べさせて欲しいな。なんて思ってない。
「よし、お兄ちゃんにメールしとくか」
「ちょ、やめっ！」
ニヤリと、真奈の笑い方が悪魔に見えた。
「一途だよねぇ、ゆーいはぁ。中学一年のとき、うちのお店に遊びに来てからだから、足掛けもう四年？」
「……いーじゃん、格好いいじゃん。あんたのお兄さん」
「まぁ、見た目はねぇ。ウチの一家は、基本的に見目いいし」
「自分で言うか」
おさげを掴んで、軽く振ってやる。リス娘がくすくす、楽しそうに笑った。
「でも妹的には、あまりオススメしない物件だよ。本人、そういうの超にぶいから。本気で付き合いたいなら、いっそ玉砕しまくる覚悟で、告白しまくった方が効果あるかも」
「無理だよ。あたしは、ほら、真奈みたいに、女子っぽくないし、やたらと背もでっかいし、全然、かわいくな――」
べしっと、結構強めに頭を叩かれた。
「私の容姿を理由に、言い訳してほしくないなぁ？」
「……ごめん」
悪い癖がでた。
頭を下げて謝ると、今度はひらたい掌が乗ってきた。
「大丈夫だよ。唯はさぁ、私が知る女子んなかで、一番かわいいよ」
「自信ないんですけどーっ」
両腕を回して、冗談めいて抱きついてやる。そうしたら、「ういやつよのぉ」とか言いながら頭を撫でてきやがった。
「私さー、唯とだけは、これからも友達でいたい」
「んじゃ、あんたの兄さん、くれ」

「それは頑張れとしか言えませんなー」
二人してアホなことを言い合ってから、離れた。
「大体ね、ゆーいがお兄ちゃんに惚れてなかったら、私がゆーいを嫁にするとこだわ」
「なんでそうなるし」
「私のが、ゆーいを愛しているからだぁ～っ！　この平らな胸とか最高っ！」
「さわんなっ！」
「よいではないか！　私が大きくしてやろうっ！」
「死ねっ！　セクハラオヤジがッ！」
頬を寄せてくる真奈の頭を、割と本気で叩いた。どたばた暴れつつ、後から人がいなくてよかったなと思った。

ひとまず冷静になってから、真奈が思い出したように聞いてきた。
「昨日さぁ、なにかあったの？」
「なにかって？」
「覚えてないの？　唯、ゲームの途中で、全然反応しなくなっちゃうんだもん」
真奈の瞳に不安そうな色が混じった。本気で私のことを心配してくれている様子なのだけど、いまひとつ的を得ない。
「私、なにか変だった？　昨日の夜十時にログインして、マナと遊んで、それから普通にログアウトしたじゃない」
「してないよぅ。魔王城に行く途中で、黒猫っぽいモンスターに合って、ユーイが先制攻撃受けてから【睡眠】の、バッドステータス受けたでしょ？」
「……そうだっけ？」
「受けたよ。それで黒猫も、どっか逃げちゃって。わたし、ユーイのこと、ぽかすか殴ったんだよ。全然反応くれないから、本人まで寝落ちしたのかなーって思った」
「……えぇと……」

少しずつ、昨日起きたことを紐解いていく。けれどしっかりした形にならなくて、むしろその部分だけが、ひどく曖昧だった。まるで霧がかったよう。思い出せば、なにか、ざざ、ざざざ、と波の音が聞こえてくる。
「そだ、ゆーい、すけさんのことは覚えてるでしょ」
「すけさんって、役所のヒトだよね」
「はい？」
真奈の顔が「なに言ってんの？」とばかりに、大きく横に倒れた。
「いや、すけさんつったら、モンスターじゃん。ほねっこの。いろいろ種類おるけど」
「え？　アロハシャツに、麦わら帽子かぶってたような」
「常夏仕様！？」
ぶはーっと、真奈がいきなり吹きだした。それから机を叩いた後で、もう一段階、わりと深刻な表情で見つめてくる。
「唯、ほんとのホントに、大丈夫？」
「えーと、その、なにが？」
「んー、ちょっとネットで調べとくねぇ。それまでは異世界行くの、やめよ」
「そもそも真奈が誘ってきたんでしょうが」
「ゆーいだって、結構ハマってたくせに。あっ、それより明日のことだけど――」
真奈が言いかけたとき、図書館の入り口の扉が開いた。入ってきたのは、大きなスポーツバッグを抱えた茶髪の男子生徒。つい一時間前に、すれ違ったばかりだ。
「――新元くんっ」
名前を呼んだのは、真奈だった。同時に机が大きな音を立てた。とっさに立ちあがろうとして、膝をぶつけたらしい。
「真奈っ、だいじょうぶ？」
「うぐぐぅ……」
悶絶するリス娘の頭を撫でてやると、新本もまた、どこか驚いた

顔をしながらこっちに歩いて来た。
「日野、帰ってたんじゃねーの？」
「なんでよ」
「いや、だって、約束がって――。あぁ」
一人で勝手に、会得が言ったというように頷いた。口端だけ吊りあげて笑うその顔は、見栄えは悪くない。むしろ良いほうだと思うけど、私はあまり好きじゃなかった。
「俺もそっち行っていーかな」
私が答えるまえに、どこか軽薄そうな表情を浮かべてやってくる。
「よっと」
スポーツバッグを、机のうえに乱暴に置いた。音を立てて、椅子を引く所作なんかも嫌だなと思う。普段は冗談めかしているけれど、岸田先生に妙につっかかるところも、率直に言って嫌いだ。
「二人で、勉強でもやってたん？」
「そんなとこ。新本、くんはどうしたわけ」
「俺もベンキョー」
本当かよ、と口元まで言葉が出かけたけど、どうにか押し留めた。
「ファミレスでご飯食べるって言ってたのは？」
「断ってきた。うん、断ってよかった」
どうして、と尋ねるのも面倒くさかったから、黙っておいた。
「ってかさ、岸田さん、その髪、かわいーね。普段はコンタクトだから、メガネも新鮮」
「あっ……」
隣で真奈が、びくっと両肩を振るわせた。机の下であたしの手を握ってくる。それからほんのり、顔を赤くさせてから、
「ありがとう……」
はにかむような、それでいて、あたしには見せてくれたことのない笑みを浮かべる。
花が咲いたようなっていうのは、こういう顔に違いなかった。
おのれ新本。

「真奈、そろそろお腹減らない？」
「ほぇ？」
「昼ごはんまだでしょ。あたしも走り回ってお腹すいたし。どっか食べにいこーよ」
私の親友を、そして岸田先生の妹を、こんなチャラい男にはくれてやらん。
一刻もはやくこの場を離れようと思い、真奈の肩を強引に持つ。
「なんだったら、ウチ来ていいから。お昼作ってあげるから」
「えぇっ！　日野ってメシ作れんの？　マジで？」
蹴っとばすぞ新本。言いかけたけれど、真奈の手前、やめておいた。しかもあろうことに、真奈が花咲いた「乙女モード」のまま、にこにこして、私の手を払う。
「唯の料理ってね、とっても美味しいんだよ～。うち、喫茶店やってるから、家族みんな料理できるけど、唯はそれに負けず劣らずの味を作ってくるよ」
「……真奈は料理、いぃっ！？」
机の下に隠した手で、こっちの手の甲をつねられた。
「どうしたの、ゆーい？」
にっこり。
中学時代の家庭科実習で『ダークマター・カレー』『デス・オムライス』『ブラックホール・ミソスープ』を作った伝説は黙っていろ。と訴えていた。
「日野の料理、食ってみてー。オーダー一名追加で」
「勝手に決めんなっ。分量増えると面倒くさいんだからっ！」
余裕が無かったので、もう真っ向から睨みつけた。新本はへらへら～と笑うだけだ。
「あぁー、ちゃうちゃう。俺もちゃんと金出してつくっから、料理対決しようぜ」
「……は？」
「俺んち母子家庭でさ、結構フツーに料理してっから、人に食える

物はだせるぜ。確か日野んとこも、オヤジさんと二人暮らしだろ？」
「なんで知ってんのよ」
もう嫌悪感を隠しても無駄かなと思って、普通に言ってやることにした。新本とは高校に入ってからの知り合いだから、まだ数ヶ月しか経ってないのに。
「いや、俺ら、席となりじゃん。岸田さんと話してるのとか聞こえてくるし」
「盗み聞きしてるんだ」
「そーいうわけじゃねーけど。日野ってさぁ、もしかして俺のこと嫌い？」
「うん。割と嫌い」
「ゆ、ゆーいっ！」
真奈が、机の下でぎゅうぎゅう抓ってくるけど、無視した。
「校則で禁止されてること普通にやってくる奴とか、あたし好きじゃないんだよね」
「それって、俺の髪のこと言ってる？」
「うん」
「そっかー」
新本が前髪の先をつまんで、指でまわした。
「黒に染め直したらさ。俺もメシ食わせてもらえっかな？」
「却下」
「なんでだよー。皿洗いもやりまっせ」
「しつこいって」
吐き捨ててやると、新本もさすがに苦笑いした。それでもどこかおどけて、「ごめん」と両手を合わせて席を立った。スポーツバッグを肩に下げて、あとは何も言わずに図書室を出て行く背中を見送った。そうしたら、
「ゆーい」
ぎゅうっと、リスに頬をひっぱられた。
「なんで、あんなこと言ったんよ」

「……あたひはわるふないひ」
「悪いよ。今のは誰がなんと言おうと、唯が悪い」
少し捻りをいれてから、両手が離れていった。
「断るにしたって、さすがにあんな言い方はないでしょ」
「いや、だってさぁ。新本って絶対、真奈に気があるじゃん？」
「ほへ？」
リス娘が、赤く染まったままの顔を、少しだけ傾むけた。
あぁくそ、可愛いな本当に。
「新本ってさ、自分の軽いキャラで誤魔化してるけど、直人さんのこと、毛嫌いしてるじゃない。なのに妹の真奈のことは好きだから、関係作るために、友達の私の家にごはん食べに来たいとか、そういうのは———」
「……ゆーい、本気で言ってんの？」
「あたり前でしょ」
「ほぅ……。いいよ、最後まで言ってみ、コラ」
真奈が、にこにこと笑顔で脅してきた。本気で怒っている時の顔だった。
「いや、あのね、本人の気持ちが一番大事だってのも、わかるよ。でもやっぱ、大心友としては心配だし。まだ顔合わせて数ヶ月の男子が、家にご飯来るってのはよろしくないかとー」
「よくわかりましたぁー」
広げていた勉強道具を手早く片付けて、真奈が席を立った。同じように立ちあがろうとした私の両肩を押す。
「ゆーい、今日一日だけ、絶交させておくれ」
「え」
「じゃあ私、実家に帰りますんで」
笑顔で言い切って、真奈が足早に図書室を出て行った。私は一人、ぽつんとその場に残されて、
「……新本なんて、ダイッキライだ」
机の上に突っ伏した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5090u/

YOU＝？　鏡あわせの平衡世界

2011年7月9日03時23分発行